近世神話の射程と可能性 神話概念の拡大

金鈴 沢木 英英 之之 山斎 下藤 久 英 夫 喜

趣 旨 鈴木英之

起を試みたものである。 日本思想研究における射程と方法的可能性について問題提 本パネルは 「近世神話」という新たな方法概念を提示し、

きたといってよい。 近世、近代、 中で形成されてきたものである。 るもののルーツを追い求め、 時代を切り 神話とは、 世界や自分自身、 角くための 現代にいたるどの時代であっても、それぞれ 「神話」が求められ、 明らかにしようとする営みの また自らを取り巻くあらゆ 古代、 中世はもちろん、 創造されて

話

われ、 ある。 である。宣長にも記紀からは決して導き出すことの出来な ようとする志向自体は、 と」として強く批判した。だが注意すべきは、宣長は、た 長は、こうした中世的な言説を後世に附会された「ひがご が爆発的に生み出されたのである。 の宣長のイメージから、こうした事例を例外的だと捉える い神解釈が認められ、また西洋の天文学的知識をもとに神 しかに中世的な知のあり方を否定したが、根源へと遡及し の世界観 神話創造の営みが大きく昂まった時代のひとつに中世が 記紀神話から大きく飛躍した独自の神話 主に密教に基づく習合思想によって神々の解釈が行 の再構築を行っていた。 中世と何ら変わることがないこと 近代文献学の祖として 近世に入ると、 (中世神話) 本居宣

選び取り、自らが考える正しい神話をまとめ上げようとし きものなのである。 ものの、近世においてもなお、中世同様に自由な神話創造 た平田篤胤にも認められる。 のは適当ではない。むしろ、近世にふさわしい時代の知を いて創りあげた「近世の神話」として積極的に評価すべ 同様の事例は、様々な文献から言説を つまり、学問的手法は異なる

の営みが存在していたのである。

〜九○年代を通じて大きく研究が進展した。同様に、近世 中世の特異な神話群が正当に評価されるようになり、 正義によって中世日本紀 ることも容易になる。 世・近世が断絶することなく連続していると認識すること なる。また根源への遡及を求めるという点においては、 に載せられることのなかった近世における神話創造の営み 神話を方法概念として提示することで、これまで殆ど俎上 世神話」に着想を得ている。一九七〇年代初頭に、 方法概念としての「近世神話」は、言うまでもなく「中 より積極的に研究対象として取り上げることが可能に 中世・近世双方の研究者が互いの領域にアプローチす (中世神話) が見出されたことで、 八〇 伊藤 中

ち っの研究者が既にいらっしゃることも承知している。 近世神話という語を用いずとも、 あらためて「近世神話」という方法概念を大きく 同様の問題意識をお持 だが

補

究の射程を大きく広げる可能性を秘めているのである。 入することを我々は期待している。近世神話は、 能など、幅広いジャンルの研究者が関心を抱き、 提示することで、思想はもちろんのこと、文学・歴史・芸 今後、 研究へ参 研

・世神話から近世神話 研究史と方法論を中心に

中

斎藤英喜

は、 文献学の始発という位置づけ、または「近代」なるものの 神説』や本居宣長『古事記伝』など。それらは中国儒教の が活性化した時代でもあった。たとえば山崎闇斎 される古代神話を意味しよう。神話とは「始原」「原型」 自己言及性の呪縛という論点で取り上げられてきた。 「日本化」の問題、あるいは「古代」の再発見、近代的な 古層」がキーワードである。 儒学者や国学者たちによる『記』『紀』の注釈、 般に日本神話といえば、『古事記』『日本書紀』に代表 しかしその一方で、 『垂加翁 近世

ぐる中世の僧侶、 で明らかにされたのは、『日本書紀』『先代旧事本紀』 した、「中世日本紀」研究に目を向ける必要がある。 助 しかし神話テキストの「注釈」といったとき、近年進展 の的な作業ではなく、 近代文献学のように原典を正しく理解するための 神祇祭祀者、 注釈することを通して、原典の 神道家たちによるに

造であったことを評価する視点である。 『日本書紀』を超え出るような、 中世 固 有な一 一神話 0 創

ギー 世信仰 という豊饒な宗教世界を切り開いたのである た、これまでの神話研究の方法を突き抜けた、 いう古代神話 その研究視座は、 :史の定型を揺さぶり、 比較論、 [のイメージの限界を暴き、 始原論、 従来の顕密仏教や本地垂迹説とい 発生論、 あるいは「古層」「始原 構造論、 さらにイデオロ 作品論といっ 中世神話 う中 لح

事記 また、『古事記』を注釈する手法を通して、 た近世の注釈学にも、 記伝』である。 実践として評価する視点である。 ば近代文献学の先駆けとされた本居宣長の 「日本化」、「古代」 こうした中世日本紀、 とは異なる、 近世固有の新しい神話を作り出す知の あらたな読みなおしを迫る。 の再発見、 中世神話の研究成果は、 近世神話としての 文献学の始発とされてき 『古事記 八世紀の『古 伝 たとえ -国儒 『古事 教

けていく作法など。

だが、そうした「起源」を求める思考・表現は、けっして 間 歴史を超越してあるわけではない。たとえば あった。「起源」へと遡及していく思考・表現様式である。 この生死、王の由来、 あらためて「神話」 古代律令国家にもとづく世界の起源を語りえたが とは、 神々の系譜などを語ることが目的で 天地の起源、 食物の発生、 記

> とえば仏教と結びついた王権儀礼=即位灌頂 身する神々たち。また天竺・震旦・本朝という「三国世界 そのままの神話では、 いは貴族社会を超えた人びとの救済者としての仏菩薩に変 い知を媒介して解釈し、 記 するシャーマン的宗教者の実践を、 その起源を語ることはできない。そう認識されたとき の普遍性・超越性の獲得。 『紀』神話に説かれた起源を、 鎌倉時代以降の中世の現実を意味 読み替えることが要求される。 さらに神と交流 中世の時代にふさわし 仏教の観想と結び付 の由来、 神と合

ルは、 刷 K びとの社会関係を超えた、 本を享受できる近世社会に生きる人びとの心性や規範とし を語ることになる。 て読み替えられるのだ。それはまた藩単位で分断され あっても固有な「神話」を生み出す。 こうしたあらたな「 ・出版されて流通する時代とかかわる。 神道家たちのあいだで書写された神話テキストが 写本として伝えられた『記』『紀』テキストが、 起源」へ 新しい共同体意識 の遡及=創造は、 そのメ 部の公家や僧 =皇国の起源 ル 近世社会 クマー

源を主宰する超越神=産巣日神が生み出 かしそのことを神話の世俗化とみなしてはならな が説く「皇国 |の古 人の真心」とは、 したと注釈され 天地 の起

話から近世神話への展開が見てとれよう。 で導き出されたのである。ここに「一神」をめぐる中世神 すリスト教)というあらたな世界認識による普遍性によっ 宣長の産巣日神という超越神は、「西洋」(天文学・地理学・ という三国世界観による普遍性にもとづくのにたいして、 という三国世界観による普遍性にもとづくのにたいして、

いう課題へと開かれていくのである。
で、近世神話をめぐる議論の視野は、近代の捉えなおしといく想像力や知をもたらす。これを「神話知」と呼ぶことくれる。と同時に、神話は、この現実を超越し、変革して起源を語ることで、われわれのアイデンティティを支えて起源を語ることで、われわれのアイデンティティを支えて起源を語ることで、われわれのアイデンティティを支えて

近世の現実と神話――宣長・中庸・篤胤 (金沢英之)

定める。
定める。
定める。
定める。
に世神話という語の有効性を見た神話が近世の世界像の中で再配置され、新たな意味を持た神話が近世の世界像の中で再配置され、新たな意味を持た神話が近世の世界像の中で再配置され、新たな意味を持た神話が近世の世界像の中で再配置され、新たな意味を持た神話が近世の世界像の中で再配置され、新たな意味を持ためる。

『三大考』は、宣長の門人であった服部中庸が、『古事記』のように出来上がったのかを、十枚の図をまじえて説明したものだ。そこでは、宇宙はムスヒの神の力によって出現した「一物」から、上へ分かれたものが天となり、下へ垂れたものが黄泉となり、中央にとどまったものが地となったとされる。また天・地・黄泉という神話的三世界は同時たとされる。また天・地・黄泉という神話的世界像と近世の自然科学的世界像との整合が果たさ神話的世界像と近世の自然科学的世界像との整合が果たされている。

を継いだ本居大平も、この点を批判した『三大考弁』を著同じ鈴屋門人のなかから批判的な見解が表面化する。鈴屋こうした『三大考』の目新しい所説に対し、宣長の没後

大考弁々』を書くなど、多くの論者を巻きこんだ論争に発し、一方、平田篤胤が『三大考』を擁護する立場から『三

展した。

たのだろうか。
たことが判明する。宣長はなぜこのような理解にこだわったことが判明する。宣長はなぜこのような理解にこだわっ同定する説が実は宣長の指示によって成立したものであっところが、『三大考』草稿類の分析からは、黄泉を月と

に近い、最上部に位置していたのだとされる。 『古事記伝』において、黄泉国はただ「下方」にある世 でが、最上部に位置していたのだとされる。 に近い、最上部に位置していたのだとされる。 で近まりに遡って考えれば、上下はあるのだというのであることはわからないが、『古事記』の神話を通じて世界のの図を描き、上方の「高天原」に近い側を地球の「頂上」であり「皇国」の在りかとし、その反対側を「下方」と明めに立ている。今の現実だけを見ている限り地球に上下があることはわからないが、『古事記』の神話を通じて世界のることはわからないが、『古事記』の神話を通じて世界のることはわからないが、『古事記』の神話を通じて出来のである。そして、自分たちの国はもともとその中でもっとも天とされていた。 であり「皇国」の在りかとし、その反対側を「下方」と明めては、小篠文は、一下方」とは、小篠文は、一下方」と明めていたのだとされる。

球」を挟んで反対にある世界ということになり、アマテラーすると、「下方」にあるとされた黄泉は、高天原と「地

れていよう。

は古代の神話から、近世の現実をあらたに説明し、根拠づの中で黄泉と月とが結びつく機微が納得される。このように、宣長―中庸における黄泉の位置づけは、西さな変容をもたらすなかで、なお自分たちの根拠となるもきな変容をもたらすなかで、なお自分たちの根拠となるもきな変容をもたらすなかで、なお自分たちの根拠となるもだの自然科学的世界像との接触が、現実認識そのものに大きな変容をもたらすなかで、なお自分たちの根拠となるもどでは、当時であるといるというには、

ける近世の神話となったのだった。

|神話| からみた平田篤胤の神代像 (山下久夫)

だと考える。もっといえば、近世後期に創造された神話 といわれる。だがここでは、そこにむしろ篤胤の積極的な 古典を注釈ではなく、自ら古史・古伝のテキストを作成す みたいわけである。 近世神話の一環としてその意義を捉え直す視座の確立を試 創造力を見出したい。逸脱は、 る営為は、正当な古典注釈からは逸脱も甚だしく恣意的だ 体相を示し、『古史伝』で古典観や思想を述べた。 成文』を作成した上で、『古史徴』において取捨選択の具 選択により自ら「正しい古伝」と信じるテキスト= 「を示すことにしよう。 知られるように、 今回は、 篤胤 次の三点にわたって問題の糸 は、 篤胤自身による神話の創造 諸々の古文献 から 所与の 『古史 の取捨

が、

n の度に反復されながら伝えられていく、とする点が注目さ 魯美命の「神の御故事」を単に延々と伝えているのではな を代々伝えているとして重んじた。その際、 りや記載漏れのある記紀よりも、 る。「神祭り」という、宗教的な実践行為のくり返しが まず第一に、 代々の皇美麻命=天皇による「神祭り」の「神祭り」 篤胤が神代像

・古代像を描くとき、 祝詞こそ「神の御故事」 祝詞は 魯岐神 伝え誤

> した層の要請と呼応していたことは十分考えられる。 地神官たちの存在が浮かび上がる。 朝神拝詞記』や『玉だすき』の読者である気吹舎門人の在 ある。当然、「神祭り」で神代を喚起する主体の位相 ものとなる。祭りという現場に始原が立ち現われるわ り」という宗教的実践を介してその都度眼前に喚起される 歴史の遠い彼方には収まらず、 介在するのである。その結果、 後世 篤胤 篤胤の神話創造がこう への流れの中で「神祭 の神代像・古代像は

を神話と関連した光景として捉える感性である。鍛えられ 実践などで培われた「神話 度ということになる。 予測を立てておけと勧めるのは、 と主張した。古文献に向かう前に、あらかじめ確信に近い で古文献を開いたとき、 と、くり返し予測を立てておく必要があるという。その眼 世間の様相をよくみて、世の始はこうであるに違いない 献の読み替えを主張している点である。この読み替えこそ るというわけである。「神話の眼」によって記紀をはじめ いくと、古典研究の常識さえわきまえない主観に過ぎた態 第二に、宗教的実践で獲得した「神話の眼」による古文 「神話の眼」によって、古文献の誤伝や脱漏を看破でき 神話の創造につながるのである。 だが、篤胤の要求するのは、 脱漏や誤伝等も自然と感知できる の眼」なのだ。 近代的な文献学の尺度で 篤胤は、 日常、 常々天地 天地 世間

代に向かう知の欲求は、 脱却させ、全国的視野 代憧憬とは異なる大きな意味をもってくる。眼前の場所が 媒介として、 神話空間を幻出することになった。さらには、 導入しつつ、眼前の光景を神話の文脈に読み替えることで とみてよい。 ているのである。 ネットワーク形成へと向かわせる重要なファクターとなっ り。ここにも、あそこにも……!」という形で「古さ」を 考古学ブームに代表されるように、「神話・古代の痕跡あ 神話的由来、 の動きが顕著となった。この時代思潮に、 として己の住む空間の新たな捉え直し、 創出)である。一八世紀半ば以降、 話を作る営為であり、「近世神話」の一つといってよい。 い、情報交換に余念がなかった。それは昔に戻るどころ !価値の再発見につながるのである。人々は、 第三に、神話空間の幻出(目に見えない形で存在する空間 人々の知を「おらが村」「おらが町」「おらが藩」 眼前の光景を唐土や天竺にまで通底する入り 伝説・伝承をもつ地であることの証明が、 彼の創造した神話は、 平田篤胤は、こうした知の最先端にいた (日本) へと向かわせる。 単なる懐古趣味以上の、 人々の間に外圧を契機 西洋天文学や鉱物学を 空間価値の再発見 神話は単なる古 神代文字や 道教思想を 神話や古 全国的な

> れもまた、「近世神話」のありようを示すものだと思われ グロー バルなトポスとして再発見されたのである。

とする古文献を読み替えながら、自ら神話テキストを作成

近世的現実の起源・由来を求めて新たな神

る

 \Box

鈴木英之・北海学園大学准教授

(斎藤英喜・佛教大学教授)

山下久夫・金沢学院大学名誉教授 金沢英之・北海道大学准教授